

第5回まちづくり部会 摘録

日 時：平成22年4月5日（月）14:00～17:10

場 所：本能寺文化会館 5階ホール

出席者：

- | | | |
|-------------|------------|--------------------------------------|
| うえむら
上村 | たえこ
多恵子 | 詩人，京南倉庫株式会社代表取締役社長 |
| おおしま
大島 | さちこ
祥子 | スーク創生事務所代表，楽洛まちぶら会事務局 |
| かも
加茂 | みどり | 大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所主任研究員 |
| かわさき
川崎 | まさし
雅史 | 京都大学大学院工学研究科教授 |
| こじま
小島 | ふさえ
富佐江 | NPO法人京町家再生研究会理事・事務局長 |
| たにぐち
谷口 | ともひろ
知弘 | 中京区基本計画策定委員会座長，同志社大学大学院総合政策科学研究科教授 |
| つかぐち
◎塚口 | ひろし
博司 | 立命館大学理工学部都市システム工学科教授 |
| どい
土井 | つとむ
勉 | 右京区基本計画策定委員会座長，神戸国際大学経済学部都市環境・観光学科教授 |
| ふじい
藤井 | さとし
聡 | 京都大学大学院工学研究科教授 |
| ふじた
藤田 | あきこ
晶子 | 株式会社京都リビング新聞社営業・編集統括マネージャー |
| みつもと
光本 | だいすけ
大助 | 公募委員 |

1 開会

2 議事

(1) 京都市の将来の都市構造について

塚口部会長

お忙しい中、お集まりいただきお礼申し上げます。本日は、基本計画第1次案として、都市構造のほか、各分野別の基本的考え方を8つの分野で議論する。本日で第1次案をまとめるため、建設的な御意見をいただくようお願いする。

本日の会議の進め方は、資料に記載されているとおり、まず、都市構造の議論を行いたい。これまで都市構造についてまとまった議論ができていなかったもので、ここで集中的に行った後、各分野別方針について、便宜的に4分野ずつ、二つに分けて議論したい。

事務局から以下の資料を説明

- ・ 京都市の将来の都市構造について

塚口部会長

それでは、質疑を行う。時間も限られているため、行政側も積極的に議論に参加いただきたい。

上村副部会長

都市構造の基本的考え方について、従来から保全・再生・創造が京都市の大きなゾーニングであるが、長期的に考える時にはメリハリが大切と考える。そのため、基本的考え方の保全・再生・創造が、新たな視点のすべてにかかるとは混乱を招く。保全地区における視点、再生地区における視点、創造地区における視点を整理し、それに応じた政策を打っていかなければ、市全体が混乱するのではないか。歴史・風致地区と、産業・活力の観点から再構築しなければならない地区がひとまとめにされており、特に創造については分けて考えなければならない。同じ考え方では、具体的に実行するときにもたないで、もっと細かく色分けして打ち出していくべきである。

土井委員

都市構造のイメージが共有しにくいとの御指摘だったかと思う。そのためには、マンガでよいので京都全体の都市構造を示したうえで、各エリアで強調すべきものを示してはどうか。また、五つの都市構造についても同様に、

マンガなどの例示をすればイメージが共有できるのではないか。

もう一つは、公共交通を優先した交通体系について、前回は議論されたように自転車が抜けることのないよう、公共交通を優先し、地域によってその位置付けが変わっていくと記載した方が大事なことが伝わるのではないか。

塚口部会長

京都市基本構想に掲げている保全・再生・創造の考え方について、すべての地域でこの三つを同じウェイトで実現するのは混乱を招くため、メリハリを付けつつ、例えば保全を第1に考えるところでも、再生・創造を調和させていく。お二方の意見を纏めると目指すところは同じではないかと感じる。

上村副部会長

「京都らしさの継承」について、人によって京都らしさが異なり、抽象的である。保全・再生の地区では理解できるが、創造の地区にまでこの視点がかかるのであれば都市の開発を阻害してしまうのではないか。すべてに規制を掛けるのは、京都の活力を考えるうえでの阻害要因となる。いずれのゾーンの中でもメリハリを付けて、保全、創造、再生を分類していくことが大切。抽象的な「京都らしさ」は現場の混乱の元になると思う。

小島委員

京都らしさをどう捉えるのかを分かりやすく示すことが必要である。京都らしさを導き出した根拠は、「まちの特色を生かす」、「歴史・文化と環境を組み合わせた」と書かれてあるが、これも抽象的で分かりにくい。数日前に京都新聞に祇園祭山鉾連合会の会長が町衆の力、京都では、番組小学校のように権限がまちの中にあり、自分たちで決めていた、との文章を書かれていた。これを踏まえると、市民によるまちづくり活動も京都らしさに入ってくると思う。まちをどのような大きさにするかは問題だが、元学区がまちを支えるための組織を持っていたこと、それを大きな枠の中での京都の特色、つまり市民がもう一度力を取り戻すことを京都らしさとしてはどうか。単に歴史、景観だけでなく市民の力も京都らしさにつなげてほしい。

藤井委員

京都らしさの定義は人によって異なるが、例えばいわゆる古い景観や町並みがそれに該当するものであることに反対はないと思う。ただし、先ほどの御意見で挙げられた「市民の力」のように、京都らしさとは、本当はもっと潜在的なもの、含みのあるもの、広がりのあるものである。一言で言うなら、

1200年も都を維持するには、京都人の「気合」の様なものがなければ続かず、そうした千年以上も持続し続けた「気合」こそが京都らしさの本質である。その理念を押さえたうえで、計画を作っていかなければならない。

そうであるならば、創造も京都らしさと相反する物ではない。(明治時代には極めて近代的であった)琵琶湖疏水の整備なども京都の文化、京都力があつたからこそ実現できたものである。京都の潜在的な町衆の力があるからこそ、新しい物を作らしめるのであれば、保全、再生、創造は相反するものではない。

大島委員

事業者、企業の頑張りも期待したい。市民や地域に期待するだけでなく、事業者への期待も明文化してはどうか。京都には地域密着型の事業を展開されている不動産業者もいるのでその力を魅力的なまちづくりとして活用すべきである。資料には、町家などの地域資源を市民や行政がどう活用するか、と書かれているが、事業者も含めてはどうか。本日都心部にテナントを誘致される方と話す機会があつたが、京都に求めるものは他都市と違うようである。その個性を伸ばす形で育成、背中を押してはどうか。

加茂委員

長期を見通す新たな視点の都市空間のマネジメントについて、作成の根拠を見ると、市民のまちづくり活動から導き出されている。しかし、その結果としての文章が、かなり一般的なエリアマネジメントについて書かれており、京都らしさが少ない。自治意識、人を育てる視点がもっと入った書き方としてはどうか。

谷口委員

私も京都らしさには住民の自治力が大きいと思う。住民、企業、行政の三者がどう力を合わせるかが大切。そのための都市空間のマネジメントには、物理的なことだけでなく経済的なことも含まれるだろう。その中で行政がどのようにエリアマネジメントを進めるのか、現時点の考えを聞きたい。10年前と比較すれば、区の中にまちづくり推進の部署が出来たりしている。コンパクトシティを検討すれば、区の境をまたぐ議論が出てくるだろう。

事務局（山本都市企画部長）

これまでの経過を申し上げますと、平成3、4年に都市づくりについて御議論いただき、半民半官でまちづくりをサポートする「景観まちづくりセンタ

一」を立ち上げた。市民の意見を聞きながら都市づくりを進め、また区役所のまちづくり組織とも協力しながら、ピース状のまちを作っていきたい。

そこでエリアマネジメントの観点からは、住民の方との取組以外に資源の有効活用や、5年後に検証し直すサイクルなどの時間軸を置くことを考えている。これらを総括し、どう進めるかはこれからの議論だが、協議を進めながらいいまちを作っていきたい。

谷口委員

これから議論するということかと思うが、市長がおっしゃる徹底した市民参加ができる仕組みがまだまだ十分ではない。空間の捕らえ方が、どうしても物理的なものが中心となっているが、そこで行われる生業（なりわい）とセットで行政も横つなぎで御検討いただきたい。

塚口部会長

最終的にどうなるかということはあるが、空間の言葉は、他部会との重複を避けるために入れたものではないか。

簡単に総括すると、京都らしさの継承・充実が委員の皆様の関心が高いところであった。京都らしさには、生活してきた市民の力が必要であり、京都らしさの中身を明確にしていくことは必要だろうが、持続的な都市づくり、京都らしさの継承・充実、都市空間のマネジメントの3つの視点で考えていくことについては、御了解いただけるだろうか。

創造も京都らしさにつながる一方、メリハリも必要との御意見があったが、今後地域別に取り組を考える際に重点化を検討する形で扱わせていただきたい。

上村副部会長

進取の気風も含めて京都らしさと言えば何もかも含んでしまうため、長期を見通す視点の中に、「メリハリを付ける」ことを加えていただきたい。

川崎委員

アジアに向けての国際化などを考えた言葉が入っていてもよいのではないか。そもそも都市の構造自身がここ最近の人口減少等の諸相に応じて見直されている。コンパクトシティについても、これまでから四条河原町、京都駅、岡崎などの拠点が作られているが、区域が寂れ、更新の時期を迎えているところもある。それをそのままの形で位置付けて維持するのか、まったく違う概念で位置付けしなおすのか。必要に応じ、拠点の構造をリデザインするなど、全体像を見ながら都市構造のネットワークを考えるべきである。

(2) 基本計画第1次案分野別方針について
事務局から以下の資料を説明

- ・ 次期京都市基本計画第1次案について

塚口部会長

まずは「都市づくり」について御議論いただきたい。

大島委員

都市づくりのみんなで目指す姿の五つ目について、まちづくりの中心が四条河原町ではなく、四条烏丸になっていることが衝撃である。これまで京都の商業中心地は「河原町」と言ってきたのを「烏丸」と言ってしまうてよいのか。事実として商業の活力は西に移ってきている事実があるが、配慮が必要であるように思う。

先ほど、京都らしさとは何かと言うことが議論されたが、政策指標として京都らしい指標が挙げられていない。まちづくりの取組数を市民やNPO法人等との協働の数とするなど、指標も工夫の余地があるのではないか。

藤田委員

四条烏丸と名指しするのではなく、四条通を中心に、としてはどうか。

また、京都の特性である大学の集積や、文化・芸術に携わる人の多さもどこかに入れておいてもらいたい。

土井委員

キャッチフレーズについて、地球環境への負荷の少なさとエコ・コンパクトは同じ意味ではないか。「地球環境への負荷の少ない」を「持続可能な」とした方がよい。大学の多さや芸術文化、健康を大切にするなども近年の持続可能性には、これらの概念も含まれている。

また、「持続的」と「持続可能な」の2種類の言葉が使われているが、意味が違うのか。事務局で議論いただき、整理いただければと思う。

塚口部会長

土井委員にお尋ねしたいのだが、「都市づくり」の分野名について、まちづくり部会として、より適切な分野名があるのではと思うが、何かお考えはあるか。

土井委員

「まちづくり」にはソフトも含まれているが、この「都市づくり」は、ハードを中心にした土地利用や施設を意味しているのではないか、と思う。

塚口部会長

「都市づくり」と言いながら、集約的な都市機能配置や土地利用の話であり、そういうタイトルの方が分かりやすいのでは、と思う。

上村副部会長

指標について、土地利用ということでは、南部地域の製造品出荷額を指標とするより、市全体の企業立地件数などが重要ではないか。企業立地が進んだ結果、製造品出荷額が伸びるのは賛成だが。

また、この分野は先ほどの都市構造でのメリハリを具体化し、打ち出すための第一歩に当たると思うので土地利用の方向性をはっきりと打ち出してもらいたい。

塚口部会長

10年後の姿について、色々なことが書かれているが、これだけのことをここで書く必要があるのか。もう少し集約できるのではないか。

また、四条烏丸を出してよいのかとの意見があったように、10年後の姿としてピンポイントにいくつかの地区を取り上げているが、具体的な地域を例示で一つ挙げるのではなく、案のように三つも挙げるとなぜ限定したかが分からない。全体としてA3判1枚にまとめるために文章を整理できるのではないか。

光本委員

どのようにして歩くのかなど、中心部の話が多く、周辺区の人がぴんと来ないのではないか。何のことか分からない市民が、かなり多いと思われる。

土井委員

私は右京区の基本計画にも携わっているが、右京区でも歩いて暮らせるまちづくりの話が出ている。その中では、歩くことが生活のベースにあるので、ゆっくり歩いて生活できる環境を大切にしたい、との話がされている。これは中心部だけでなく、周辺区でも大切なこととして、それを阻害する要因などを議論しており、中心部に限った話ではないと思う。

小島委員

四条烏丸と、具体的名前が出ているとの、らくなん進都も同様。ここだけが緑豊かで住みやすいと記載する必要があるのか。京都全体を大前提に考えてもらいたい。

塚口部会長

少なくとも誤解の生じないような記載をお願いしたい。

谷口委員

分野名も市民にわかりやすい名前にすべきである。

目指す姿等には土地利用のことが中心に書かれているにも関わらず、市民と行政の役割分担と共汗に書かれているのがソフトのことであり、これらの整合性を取ってもらいたい。行政の役割として、「集約的な都市機能の配置を検討する中で、都市像を示す」とあるが、「徹底して情報を公開し、市民と議論しながら計画をつくっていく」との姿勢をここで述べておく必要があるのではないか。

塚口委員

それでは、「景観」に移りたい。

川崎委員

「都市基盤」にも関係するが、安全で快適な歩行空間の確保について、よく無電柱化のことが書かれるが、街路樹や道路構造物、橋梁なども含めた公共空間の向上を記載すべきではないか。環境にやさしい、景観にやさしいなどが、「景観」と「都市基盤」の双方に書かれて薄まっていると思う。

そのために、「景観」の三つ目の課題に、都市景観の向上だけでなく、街路樹、橋梁などを含めた公共施設の景観の向上を図る、などを加えてもらいたい。また、「都市基盤」の目指す姿には、環境にやさしい、人にやさしい施設づくり、都市景観を誘導するための基盤整備を行う、との文言が加わってもよいのではないか。当たり前のことだが抜けている気がする。

大島委員

質問だが、政策指標の一つ目について、景観重要建造物等の指定数が現在、34件で、350件を目指すとのことだが、現時点で候補はどれくらいあるのか。

事務局（高谷都市計画局都市景観部長）

現在、調査を終えたところであり、精査はこれからだが、大きな邸宅や近代建築も含め、700件くらいあるのではないかと推計している。今後10年で半数ほど指定できればとの目標としている。

上村副部長

第2回部会でも議論したが、新景観政策によって新しい開発が阻害され、活性化につながっていないという現状が大きな問題としてあると思う。このことを現状・課題に記載していない理由は何かあるのか。

事務局（高谷都市計画局都市景観部長）

新景観政策によって、プラス面、マイナス面があるとの御指摘について、資料では短期的な影響ではなく、中長期的な影響を記載している。新景観政策については、付加価値を生み、結果として都市の価値を高めるものと考えており、今後10年という中長期的に見る中ではこのような書き方としている。

上村副部長

それであるならば、第2回部会の議論は何だったのか。景観政策の中での課題を残していること、目指す姿で検証していくことを挙げておかなければ第2回の議論が活かされていないと思う。

事務局（高谷都市計画局都市景観部長）

現在、景観政策の検証システムの構築を行っているところであり、このシステムで政策の検証を行いながら、政策を進化させていくこととしている。

上村副部長

進化・検証、見直しを行う旨を入れていただきたい。

塚口部長

新景観政策は、先進的であり、後ろ向きに評価する必要はないと思う。

加茂委員

景観はテーマパークのように保つのではなく、本来の生活の結果として現れてくるものである。京都の人が四季を楽しむなどの暮らしを行ってきた結果、それが他都市に評価されているものであり、その生活を大切にすることが目指す姿にあっても良いと思う。

藤田委員

目指す姿の三つ目は10年後に各主体の協議を始めるのではなく、これから10年かけて徐々に取組が進んだ結果を書いて欲しい。

小島委員

全体的に、この計画が守りに入っている気がする。景観も町家も守らなければならないものと記載されているが、単に守るだけではこの先の十年を生きていけない。新しい京都の景観、町家を作るために、今、古いものを検証していると思う。これから10年で日本の手本になるまちを作り上げる姿勢を持ってもらいたい。

塚口部会長

「歩くまち」について御意見をいただきたい。

藤井委員

小島さんの御意見は私自身も強く感じている。次の時で結構なので、ぜひ京都らしさとは何か、都市計画とは何か、そもそも京都が何を目指しているのかを徹底的に議論していただいて、示していただきたい。

政策指標について、自動車分担率を上げてはどうか。また、財政面もあるが、新たな公共交通の検討の継続があっても良いのではないか。

塚口部会長

あるべき姿の議論は、部会ではされていないが、融合委員会においては、議論をしているところである。

川崎委員

観光案内などの訪問者に分かりやすい道案内、倒れた時の病院の位置などの安心・安全に係る表示のことが書かれていないのではないか。

加茂委員

歩いて楽しい、ということが目指す姿や指標に現れていない。歩きたい、と思う指標が何か一つあっても良いのではないか。

土井委員

皆がにこにこ歩いている等が指標として捉えられればよいが、定量的に捉えるよりは、楽しく皆が歩いていると感じることが重要で、その気持ちを持

つためのメッセージを出していくことが大切。

車の分担率について、感想調の悪い評価を下げることは大切だが、車で来た人の不満は高まっても仕方がないので、これを峻別することは大切。ただし、公共交通を充実させるなどの不満を下げる取組は大切。また、行政の役割も交通局がすることが書かれているが市民目線のサービスのことをもう少し書いてはどうか。

塚口部会長

10年後の姿を集約できないか。例えば一つ目と七つ目、三つ目と四つ目、二つ目と八つ目は関連している。もう少し上手くまとめて書いていただいた方がインパクトがある。また、自転車について、料金体系の導入や休日等の撤去はすぐに取り組めることであり、10年後の姿として挙げるのは違和感がある。昨今は駐車場のマネジメントも検討されており、それをここに挙げても良いのではないか。

上村副部会長

広域的な視点として、私鉄との乗り入れ、国鉄とのネットワークなどが実現して初めて歩くまちが実現する。10年後の姿の中で、市バス、地下鉄レベルの改善だけでなく、広域的なネットワークをどう整備していくのかを記載して欲しい。また、分担率の指標や駐車場など、自動車とどういう関係を築いていくかも考えなければ実現しない。検討いただきたい。

大島委員

効率を追求するためだけの経営改善が図られているのではなく、駅ナカビジネスなど、利便性だけでなくストック活用も視野に入れた魅力的な地下鉄に向けて、歩いて楽しくするための改善が図られていることも希望を込めて書いてもらいたい。

谷口委員

中京区基本計画を議論する中で「通りの復権」とのキーワードが出された。木屋町や河原町、三条通などでの定期的な歩行者天国、車をシャットアウトしたイベントなど、通りを車から市民に取り戻すことから、歩く人の笑顔などが出てくるのではないか。四条通のトランジットモール化なども出てきても良いのでは、と思う。

小島委員

楽しく歩くには、商店街がもっと楽しくならなければならない。特に商店街では、ぶらぶら、きょろきょろしながら歩ける道の整備を、お願いしたい。道と言う観点から商店街をどう捉えるかとの視点を入れていただければ、歩いて楽しいまちになるのではないか。

塚口部会長

賑わいのあるまちとは何か、との観点で、一つの目的を果たした後にどれだけ寄り道したかという「回遊行動」がどれだけ増えたかも客観的指標として考えられるのではないか。

「都市基盤」について、御意見をお願いしたい。

土井委員

現状・課題に、「指定都市の中で低い道路改良率」と書かれているが、低い現状の中でどう工夫するかが京都らしさの一つである。改良率は都市計画道路の数と整備している割合で決まる数字であり一喜一憂する必要はないのではないか。

また、右京区基本計画を議論しているが、前回の基本計画でも、道路の作り方について考え、その結果を実現してきた。今回の基本計画の議論においても、西京区から久世梅津北野線の整備が予定されているが、嵐電と重なる路線であるため、梅津太秦線の拡幅に力を入れ、西京区まで伸ばす方が10年間という短い期間の中では効率的ではないか、などの話がされている。京都市でも都市計画道路の見直しの議論をされているかと思うが、地域の声も聞いてもらいたい。

谷口委員

頻繁に「いのち」という言葉が出てくるが、都市基盤にどうつながり、どう受け止めればよいかピンとこない。もう少し具体的に明示してはどうか。

事務局（西邑建設局建設企画部長）

従来の都市基盤は経済性や効率性などの効率重視であった。もちろんこれらは重要だが、今後はソフトも重視すべきとの考えで記載した。多用しすぎとの面はあるかと思う。

藤田委員

住んでよかったと実感するには、必ずしも都市基盤の充実だけが重要ではない。自然が多くてよかったという面もあるので、御検討をお願いしたい。

塚口部会長

都市基盤という分野名も工夫が必要。道路や河川の話であり，市民から都市基盤はこれだけなのか，と思われてしまう。御検討をお願いしたい。

加茂委員

緑の維持には，落ち葉の処理など非常な労力が掛かり，住民の参加がなければできない。市民，事業者，行政が一体となった維持管理と書いているが，市民自身が緑地の意義を認める，という姿を一言加えてもらいたい。

塚口部会長

それでは「住宅」について，御意見を頂きたい。

大島委員

高経年マンションへの対策は重要なことであり，目指す姿に記載されている事は良いと思う。ただし，バリアフリーや耐震化のハード面だけでなく，コミュニティの形成などのソフト面が建物を長く使ううえでとても重要。ソフト面の育成，評価を配慮する内容も加えていただきたい。

藤田委員

「建築物」にも関係するが，良質なものを残すには，補助金が利用できる制度や，良質な建築物には税金の優遇があるなど，経済的な支援がなければ本質的な問題解決にはつながらない。

塚口部会長

個人の住宅であり，なかなか難しい面はあろうが，御検討いただきたい。

光本委員

平成の京町家はいつ頃から始まるのか。早くしなければ，大きな地震などで町家が潰れてしまえば，それをきっかけに町家は地震に弱いなどの宣伝で一気に普通の建物に建て替えられてしまうのでは，との懸念がある。ビジネスになると判断されれば，不動産屋の動きは早い。非常に時間がかかっており，いつスタートするのかを心配している。E-ディフェンスも3月末には完成予定と聞いていたが，遅れているのか。

事務局（西沢都市計画局住宅室部長）

平成の京町家は今年度から取り組み、毎年度100戸ずつ、5年間かけて増やしたい。また、長期的には、2030年に1750戸としたい。この数字は、年間3500戸の木造建築住宅の半数を京町家に誘導するものである。また、E-ディフェンスは今月中には、上棟されると聞いている。

※ E-ディフェンス：伝統木造工法向けとして実験的に開発された耐震装置を備えた住宅

川崎委員

市民から見れば、暮らしが先にある。工務店や事業者等による安定した維持などが先に来たうえで、京町家が問題になるのではないか。

小島委員

キーワードとして京町家がたくさん出ており、驚いている。住宅と建築物を含め、景観やまちづくりに一貫性が必要である。住宅には「京都らしい景観」と出ているが、建築物には、「安心・安全」しか出てこず、京都の建築物として目指すことが書かれていない。京都にふさわしい建築物との指針がある方がよいのではないか。本来、京都のまちは、長屋の後ろにみんなで避難できる道があるなど、暮らしの知恵があった。本来の京都のまちが持っていた安心のための暮らしの知恵を見直し、良い形で継承するとの観点が必要である。

塚口部会長

住宅や建築物を考える時に、景観は別途考えるものか。

事務局（岩崎都市計画局住宅室部長）

住宅には、人が住まない建物は含まれず、建築物には住まいが含まれない。どう分野を扱えばよいかを議論した結果、このような形とした。住宅と建築物をどう扱うかについて、御意見があればいただきたい。

塚口部会長

景観と無関係はまずいと思うので、どちらになるにせよ、含めて御検討いただきたい。

藤井委員

京都市は非常に大きな組織であり、幾つかに分けなければ動かないために、分野を縦に割っていくことは重要。ただし、割った後、計画に書く書かないは別として、どう連携していくかは重視してもらいたい。指摘するまでもな

く、景観や歩くまちなどは大きく関係するものであり、これらの関係の見取り図などがあればよいと思う。

消防・防災について、「人間力」に支えられた「地域力」は非常に良い言葉である。すべての分野について、このコンセプトで検討いただきたい。

上村副部長

安心・安全が重視されており、それが景観等にどう関係していくかを一貫する記述等が必要だとは思う。耐震化や建築基準法などを適用すればするほど、建て替えができない。耐震性に優れた安心・安全が望まれるのはもちろんだが、それが実現できないという問題を内包しているのが京都の現実であり、それを忘れないでもらいたい。しつこいようだが、このゾーンでは、この基準が適用されるなど、各ゾーンにおける関係の見取り図があれば、市民にも分かりやすい。渾然一体としてどれが自分たちの住む地区なのかを、すべての分野を読み解かないと分かりにくい、というのは問題である。

土井委員

おそらく建築物の話になると思うが、京都の中心エリアに多くの魅力的な近代建築があり、これらも京都のまちの魅力を形成している。これらも大切にするのか。

事務局（本田都市計画局建築指導部長）

京都の場合、景観と安心安全は両輪でありどちらも目指さなければならぬ。そのため、法律の下、街並みを活かしつつ、安全を確保するやり方を模索しながら進めたい。

事務局（高谷都市計画局都市景観部長）

近代建築についても文化財行政や景観行政など、様々な施策を活用しながら景観に貢献する建物の保全を図っていききたい。

塚口部長

景観と安全などの対立するものを、いかに京都らしく両立、融合させるかが我々の使命であり、協力しながら乗り越えたい。

続いて、「消防・防災」について御議論いただきたい。

加茂委員

前回は述べたが、個人情報保護により要支援者の情報が把握しにくい問題がある。10年後の姿に、これらの情報を蓄積するとは書きにくいと思うが、高齢者などの支援が必要な人に確実に情報が届く、などを追記してはどうか。

小島委員

先ほどのことに関して、私の町内では70歳以上の方の家が色分けされ、緊急時の連絡先を記載した地図が各戸に1枚配られる。みんなで目指す10年後の姿には、各地域に安心・安全マップ、緊急時の連絡網が各地域で出来上がっている、などの一般市民や高齢者にも分かりやすい目標値があればと思う。

事務局（杉本消防局総務部長）

現行の京都市基本計画の中ですべての自主防災部で防災行動計画を策定することを掲げており、ほぼ完了している。この計画の中で、独居高齢者の居場所等のマップを作成し、町内の方が大規模災害時にこれに基づき情報共有、安否確認する取り組みを進めており、10年後ではなくもっと早い時期に実現したい。

土井委員

私も地域の自治会の会長として行動計画の作成にかかわった。しかし、自治会の加入率が高くなければ実効性がなく、まちづくりの担い手も育成しにくい。まちづくり活動や地域活動の担い手育成が、結果的に防災にも有効である、ということをごどこかで書いておく方がよいのではないかと。色々な人が参加してもらうためのきっかけづくりをたくさん行うことが大切である。

谷口委員

課題で消防団のなり手の確保や計画の実効性について書かれているが、目指す姿の中での記述が弱い。消防団中心か、それとも自主防災会中心なのか、政策指標のところでは、何らかの形で市民による防災活動を示すことができれば、市民も我々も自らがどう行動すればよいかが見えやすくなる。目指す姿の四つ目に書かれている「連携」に加え、それぞれの団体が10年後にどのような姿であればよいのかを記載してもらいたい。

川崎委員

文化財の防災は、どこかに書く余地はあるのか。

事務局（杉本消防局総務部長）

文化財の防災は、京都ならではの消防の使命であり、それも入れていきたい。

塚口部会長

些細なことだが、市民と行政の役割分担の図が、この分野だけ行政が上にきている。他の分野と合わせていただいたほうがよいのではないか。

最後に「くらしの水」について御意見を頂きたい。

土井委員

私は京都の水道は、琵琶湖疏水をはじめ、まちを作ってきたものであり、非常に歴史がある重要なものだと思っている。近代日本の象徴であり、市民に胸を張って伝えるものとして記載してもよいのではないか。

塚口部会長

直接関係無くともバックグラウンドとして重要性を伝えることは大切だと思う。

小島委員

井戸水はどういう扱いになるのか。京都は地下水が豊富でおいしい水が多い。また、防災面でも井戸水が活用できるのではないか。

事務局（山田上下水道局総務部長）

井戸水については、放流の際の下水として行政がかかわっており、その中で扱いたい。

小島委員

下水は排水のイメージが強く、水の豊かさやおいしい水と実感できない。

事務局（山田上下水道局総務部長）

保健衛生行政とも密接にかかわるものであり、関係局と連携して記載を検討したい。

塚口部会長

縦割りも重要だが、基本計画として、市民の目線からも御検討いただきたい。

川崎委員

「身近に自然を感じる本来の川の姿を復活させるため、治水優先の河川整備からの転換」と書かれているが、国の方針そのままであり、あまり京都らしくない。琵琶湖疏水の整備により白川の洪水がなくなったなど、京都は、治水と環境を両立させる知恵を持っている。これを踏まえ、まったくの自然に戻すのではなく、京都らしい姿を記載してもらいたい。

土井委員

歩くまちを支えることが非常に重要。楽しく歩いている状況をどう測るか、と考えると、商業地、観光地、郊外などで定点調査を行えば、状況把握や調査手法の洗練につながるのではないか。

塚口部会長

四条通のランジットモール実験時に、簡単な調査を行ったが、実験中はカップルが縦ではなく、手をつないで横に歩く率が高かった。このようにお金を掛けなくとも、ある程度成果を実感できる手法もあるかと思うので、御検討いただきたい。

加茂委員

まちづくり部会に限ったことではないが、本日も地域力、市民の参加、自治意識などが重要との意見が出された。高い市民の自治意識が醸成されている、との文言を未来像などの計画のどこかで記載してもらいたい。

塚口部会長

本日の議論の結果を踏まえた、修正、表現については、部会長である私に御一任いただきたい。

—————（事務連絡）—————

3 閉会